

開催地名	東京都 稲城市
開催日時	令和7年2月1日(土)10:00～11:30
開催場所	稲城消防署3階講堂
語り部	石川 弘子(福島県いわき市)
参加者	39名
開催経緯	本市の自主防災組織は49組織結成されており、避難所の設営・運営に関する訓練については定期的に実施しているところだ。しかし、1年から2年の役員交代となる組織が大半であることから、継続して避難所設営・運営訓練を実施し、市民や自主防災組織が自分たちのまちは自分たちで守る共助の取組や意識の向上を図る必要がある。
内容	■はじめに 1. 語り部の自己紹介 語り部の方は、もともと写真撮影が日課であり、地元の学校から公式に写真撮影を依頼されることも多かった。震災直後からも写真を撮り続け、現在では2TB以上の写真データを記録している。 2. 担当地区について 福島県いわき市久之浜町を拠点としており、この地域はいわき市北部に位置し、福島第一原発から30km圏内に一部が含まれる。震災による影響が大きく、避難や除染作業などの課題と向き合いながら復興に取り組んできた。 ■あの日のこと 東日本大震災発生時、本震は約3分間続いた。その直後、テレビでは3mの津波到達予報が流れたが、「そんな津波は来ないだろう」と多くの住民が油断し、川沿いの堤防に集まって津波の様子を見ていた。 その時、息子からの「戻ってこい」という電話を受け、避難を開始。間もなく津波が到達し、ある人は「黒い壁が襲ってきた」と表現するほどの破壊力だった。津波は翌日夜まで続き、さらに火災も発生した。避難所へ向かう道も、流されてきた家々で塞がれ、通行できない状態になった。自身の家は炭を使って暖を取る生活をしていたため、避難所に行かずに自宅で過ごすことができたが、多くの人々は避難を余儀なくされた。 ■その後のこと 原発が近かったこともあり、震災後は除染作業が行われた。除染で回収された土は、現在でも東京ドーム11個分にも及ぶ量が土のうのように積まれており、その一部は今も残っている。 また、津波被害によって生じたがれきの仮置き場では、遺骨を探す人の姿もあった。被災地ではさまざまな困難があったが、復興に向けた動きも始まり、震災発生から数か月後には商店街を作る企画が始動し、震災半年後にはオープンにこぎつけた。 さらに、震災の記録を後世に伝えるために資料室を開設し、震災時の写真を展示。来訪者から説明を求められた際には、日々の生活の合間を縫って解説を行っている。 ■まとめ 震災の教訓を伝えていく上で、まず「言い続けること」が重要である。語り部として、自身は女性消防クラブの一員として啓発活動を積極的に行い、子どもから高齢者、さらには在日外国人に対しても防災意識の重要性を伝えている。 また、役場や消防署とも連携し、携帯トイレの組み立て実習を行ったり、消防学校での訓練を見学したりと、現場での実践的な学びを深めている。 さらに、震災後の避難所運営では、「人と人のつながり」がいかに重要かを痛感した。例えば、避難所で「みんなで頑張っていこう」と声を掛け合い、ルールを決めて運営した避難所と、そうした協力体制がなかった避難所では、支援物資の行き渡り方にさえ違いが生まれた。 震災を教訓とし、地域の防災力を高めるためには、こうした人と人のつながりを意識し、日頃から防災の準備を進めておくことが不可欠である。

	
開催地より	福島県いわき市ご出身の石川講師は東日本大震災を自宅にて経験され、震災の直後から写真と動画を撮り続けたスライドを紹介しながら当時の体験談をお話されました。震災前と震災後の写真を交えた説明はリアリティがあり、より強く情景をイメージすることができました。また、震災後の女性消防クラブでの活動など復興に向けた話も写真付きで参考になりました。